

ミシェル・ジャルティ Michel Jarrety

1953 年生まれ。ヴァレリー研究者、詩学研究者。

ミシャル・ジャルティが、アシェット社の《文学の肖像》シリーズのために書いた『ポール・ヴァレリー』は、現在入手可能な最良のヴァレリー入門書となっている。ここ三十年来、『カイエ』の写真複製版(全 29 巻、1957-1961)、とりわけプレイヤード版の『カイエ』アンソロジー(全 2 巻、1973-1974)が出版されて以降、ヴァレリー研究は一新され、コーパスが膨大にふくれあがったこともあり、その全体像の把握が容易ではなくなってきている。そのような状況において、ジャルティの『ポール・ヴァレリー』は、生前発表された作品への読みと、『カイエ』出版以降のさまざまな知見を実にバランスよく配し、目配りのきいた入門書に仕上げられている。「システム」、「反=作品」、「散文の秘密」といった『カイエ』読解のキーワードは、たとえば「小説」、「書物」、「詩学」といった作品読解の基本的な項目とどのように関係し得るのかジャルティが提起したこの問いは、ヴァレリーを読む上できわめて生産的な問いでありつづけている。ジャルティ自身はこの問いに、主著『文学を前にしたヴァレリー』において、<思想家>ヴァレリーだけではなく、<作家>ヴァレリーを前面に押し出すことで答えようとしている。実際、書くことへの情熱が社会の中でまとうさまざまな形は、<文学>という制度そのものを批判しながら、その制度の枠内で作品を書くことを否定しなかったヴァレリーの矛盾と、密接に関係していると言えるだろう。

ミシェル・ジャルティには、このようにヴァレリーを全体像を構築した研究者という側面だけではなく、<詩学>研究の集大成という編纂者としての側面もある。『フランス詩 中世から現代まで』(1997)と『詩の辞典 ボードレーから現代まで』(2001)の二冊は、読者の幅広い関心に答えてくれる参考図書である。

主要著作

— *Valéry devant la littérature : Mesure de la limite*, PUF, coll. « Écrivains », 1991.

— *Paul Valéry*, Hachette, coll. « Portraits littéraires », 1992.

*Sous la direction de Michel Jarrety

— *La poésie française : du Moyen Age jusqu'à nos jours*, PUF, Collection Premier Cycle, 1997

— *Dictionnaire de poésie : de Baudelaire à nos jours*, PUF, 2001.

ミシェル・ジャルティ氏講演会のお知らせ

« Cioran moraliste ? »

日時：2005 年 10 月 25 日(火) 16 時 30 分～18 時 30 分

場所：一橋大学国際研究館(東キャンパス) 5 階 ML 会議室

« Valéry à l'époque de Teste et de Léonard »

日時：2005 年 10 月 26 日(水) 16 時 20 分～18 時

場所：東北大学大学院文学研究科 2 階大会議室

ジョルジュ・セバーグ Georges Sebbag

1942 年生まれ。作家、思想家、シュルレアリスム研究者。

60 年代中ごろシュルレアリスムに参加したが、1969 年にジャン・シュステルらによってグループの解体が宣言されたのちには、シュステルら「主流派」にも、シュルレアリスムを名乗って活動し続けることに固執したグループにも同調せず、むしろ思想家として独自の道を切り開こうとした。もともと哲学の出身で、今年退職するまでパリ近郊のリセで哲学教師をするかたわら、特に「時間」をテーマとする思想家としての著作を数多く発表してきた。他方 1988 年に『口にしえない我が誕生の日』と題されたブルトン論を発表したころから、ブルトンを中心にしたシュルレアリスム論、シュルレアリスムに関する資料集などを数多く出版している。

セバーグのシュルレアリスム論はいわゆるアカデミックな研究とは一線を画するが、対象を自分の思考に引きつけて論じる作家的な思考法ともまったく異なる。それはテキストそのものにあくまで密着した作業なのだが、テキストは常に書簡や草稿、ブルトンが参照した可能性のある作品等々、作品外の資料と並置され、それらのあいだに驚くべき知識と連想力にもとづいた意味の網の目が張りめぐらされることになる。それが解釈妄想に終わらないのは、ブルトン自身がそうした記号の露出に常に敏感であり、さまざまな細部に過剰な意味を結びつけていた可能性があるからだが、したがってセバーグの作業は私たちの目の前に、客観的な視線と主観的な意味付与の境界が成立しない、シュルレアリスムが開いた特殊な時空間を拓き直してみせるものだといえるのではなからうか。

主要著作（今回の講演に関係の深いもののみ）

- (1) *L'Imprononçable jour de ma naissance, 17ndré 13reton*, Jean-Michel Place, 1988.
- (2) *L'Imprononçable jour de sa mort, Jacques Vaché, janvier 1919*, Jean-Michel Place, 1989.
- (3) Jacques Vaché, *Soixante-dix-neuf lettres de guerre*, réunies et présentées par Georges Sebbag, Jean-Michel Place, 1989.
- (4) Jacques Vaché, *Quarante-trois lettres de guerre à Jeanne Derrien*, réunies et présentées par Georges Sebbag, Jean-Michel Place, 1991.
- (5) *Le Point sublime. Breton, Rimbaud, Kaplan*, Jean-Michel Place, 1997.
- (6) *André Breton l'amour-folie*, Jean-Michel Place, 2004.

ジョルジュ・セバーグ氏の単独講演会が次の通り予定されています。ぜひご参加ください。

日時：2005 年 10 月 27 日（木）午後 6 時

場所：早稲田大学文学部 39 号館第 7 会議室

タイトル：「*Le Neveu de Rameau, la nièce d'Oscar Wilde et Jack le fataliste : Arthur Cravan, Claude Cahun, Jacques Vaché*」。（通訳なし）